巻頭言

「子どもを主語にする授業」へ、今、踏み出そう

十勝教育研究所運営委員会
委員長
笹原　敏文
（幕別町教育委員会　教育長）

「子どもを主語にする授業に」

授業改革の話合いで必ず言われる言葉です。「先生が教える」から「子どもが学ぶ」へ、授業観、指導観を転換することが強く求められる状況ですが、教師主導の授業からなかなか脱却できない先生方が多くおられるように感じます。

今教壇に立つ多くの先生方は、間違いなく、「先生が教える授業」を受けて育ち、上手に教えてくれる先生に憧れて教師になった方も少なくないと推察します。自分もあの先生のように上手に教えたいと、授業技術に磨きをかけ、自分のスタイルを確立して優秀な子どもたちを何人も育ててきた、そんな先生がたくさんおられると思います。

人生の大半を「先生が教える授業」とともに歩んできた先生方が、その授業観を変えるのは至難の業だと感じるのはもっともなことだと納得します。

そのうえでなお、先生方には授業観の転換に挑んでほしいと思っているのです。予測不可能な時代を生きる子どもたちにとって、主体的に学ぶ力は必要不可欠なもので、それを育てるには、やはり「子どもを主語にする授業」への転換が必須だと思うからです。生活の多くの時間を過ごす授業の中で、自分で情報を集め、取捨選択をして判断する経験をたくさんすることができたら、子どもたちは主体的に学ぶ力をしっかりと身に付けることができます。自分で調べて気付いたことは長く記憶にも残ります。聞くことだけで学んだことよりも、ずっと身になる学びとなります。授業観、指導観を変えることは本当に難しいことですが、勇躍して挑戦してほしいと思う毎日です。

そんなある日、とある中学校の校長先生が、「意外なことに、芸体教科の先生方は子どもを主語にした授業に違和感はない」と教えてくれました。自身も体育教師であるその校長先生は、「これまでもそうやって授業をやってきた」と言うのです。なるほど、芸体教科は歌を歌ったり、運動したり、作品を作ったりするのは全て子どもで、先生はうまくできるようにポイントをアドバイスする授業スタイルが多いです。すぐ身近に「子どもを主語にする授業」があったとは盲点でした。

今では、幸いなことに、強力なツールとなるＩＣＴ機器の操作に慣れた子どもたちが、ここ数年で劇的に増えています。身近には「子どもを主語にする授業」をやってきた先生もいます。1人1台端末もインターネット環境も整備されています。「難しいけど、やってみるか」の意気込みで、教師主導の一斉授業から子ども主体の授業にする努力を始めてみませんか。先生方の努力する姿と気持ちは子どもたちにも伝わって、子どもたちも一緒に頑張ってくれるはずです。

十勝教育研究所は、そんな先生方を応援する研修、研究に数多く取り組んでいます。いつでも参考になる実践研究を提供することができる、先生方の頼もしい味方です。大いに十勝教育研究所を頼って、授業改革の道をじっくり、しっかり歩んでいかれることを心から期待しています。